

津山市歴史友好都市 30 周年記念特別展関連講演会

「森忠政の築城と手伝普請

—美濃金山城・津山城・伏見城・大坂城—」

講演録

日 時：令和 7 年 11 月 9 日（日） 13 時 30 分開会

開 場：久々利地区センター ホール

滋賀県立大学名誉教授 中井 均

《例 言》

1. 本講演録は、可児郷土歴史館が令和7年10月4日（土）から12月7日（日）まで開催した津山市歴史友好都市30周年記念特別展「森忠政と普請した城 ー美濃金山城跡 津山城跡 伏見城跡 大坂城跡ー」に伴う記念イベントとして、同年11月9日（日）に開催した滋賀県立大学名誉教授 中井均氏による講演会「森忠政の築城と手伝普請 ー美濃金山城・津山城・伏見城・大坂城ー」の記録をまとめたものである。
2. 本講演録の本文中に掲載された写真のうち、キャプションに出典等が明記されていないものは、講演者である中井均氏が撮影されたものである。
3. 講演会当日に使用したレジュメは、講演録の巻末に掲載してある。
4. 本講演録の作成にあたり、以下の諸機関ならびに個人の方々にご協力いただきました。この場を持ちまして、心よりお礼申し上げます

京都市文化市民局文化財保護課、小牧市教育委員会小牧山課、真田宝物館、創元社、津山市郷土博物館、（株）名著出版、降旗浩樹

《参考・引用文献》

秋田裕毅『織田信長と安土城』／創元社／1990年
京都市文化市民局文化財保護課『指月城跡・伏見城跡 発掘調査総括報告書』／2021年
松岡利郎『大坂城の歴史と構造』／名著出版／1988年
渡辺 武『図説 再見大阪城』再版増補／（財）大阪都市協会／1983年

《講師紹介》

滋賀県立大学名誉教授
日本城郭協会評議員
博士（文学）

【委員等】

可児市美濃金山城跡整備委員会委員長
垂井町菩提山城跡調査検討委員会委員長
恵那市明知城跡調査検討委員会委員長

【略歴】

1955年 大阪生まれ。
龍谷大学文学部史学科卒業。
（財）滋賀県文化財保護協会、米原市教育委員会、長浜城歴史博物館館長を経て、2011年に滋賀県立大学人間文化学部准教授、2013年より同教授。
2021年に同大学を定年退職、名誉教授となる。
金沢大学及び大阪大学などの非常勤講師を勤める。
専門は日本考古学で、特に中・近世城郭の研究、近世大名墓の研究。

【編著書】

『城館調査の手引き』／山川出版社／2016年
『中世城館の実像』／高志書院／2020年
『信長と家臣団の城』／KADOKAWA／2020年
『秀吉と家臣団の城』／KADOKAWA／2021年
『戦国期城館と西国』／高志書院／2021年
『戦国の城と石垣』／高志書院／2022年
『織田・豊臣城郭の構造と展開 上』／戎光祥出版／2021年
『織田・豊臣城郭の構造と展開 下』／戎光祥出版／2022年
『戦国の城と石垣』高志書院／2022年
共著『歴史家の城歩き』高志書院／2016年
ほか多数

はじめに

こんにちは、中井と申します。

今日は、森忠政の築城と手伝普請というテーマでお話をさせていただきます。可児市には美濃金山城があり、その話を何度もやらせていただいております。今日は少し趣向を変え、津山市との歴史友好都市提携という事から、森忠政が津山城へ行き、さらには、近世大名として伏見城や大坂城の天下普請といえますか、そのお手伝い役を担ったお城の話をします。

大変面白いと思うのは、現代においても、戦国時代の森氏との繋がりで旧兼山町（現在の可児市兼山）と津山市が友好関係にあるというのは、すごく面白いなと思っています。森氏が紡いだ縁で、この津山と可児とのご縁があるということなんです。

美濃金山城

〔資料1〕まず、その居城の話から。今回も展示されておりますが、森長可の遺言状というものがあります。

「一、我々あとめくれぐれいやにて候、此城ハかなめにて候間、たしかなるものを、秀吉様よりおかせられ候へと御申の事。」

つまり、長可が遺言として弟の忠政に、こんな大事な城は預けられない。嫌ということですから、もう本当は武士自体も嫌になったのかもしれない。ただここは要なんだ。織田政権が美濃に侵攻してきて楔のように打ったところ。斎藤段階の城に森家が入ってきて、美濃支配の拠点にしようとした城ですから、これは自分亡き後は、秀吉様がそれなりの人を入れたらいいだろうということ。それだけ重要な城であったということが、読み解けるわけです。

永禄8年（1565）、「烏峰城」と呼ばれていたこの美濃金山城を奪取して、森可成を入れたわけであります。可成は、この城を「金山城」と改称しております。今、申し上げましたように、森氏の美濃金山城は、織田政権の美濃支配の拠点となったわけであります。

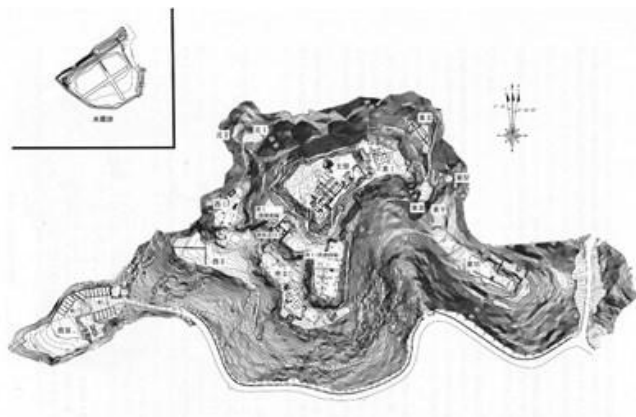
しかし、今、私たちが見ている美濃金山城には壮大な石垣があります。この石垣の城を、永禄8年の森可成の段階の城と考えてよいのかというと、それはちょっと無理があるわけです。

かつては、お城というのは、築城者＝今のお城の遺構だと見られるものが大半だったわけですが、近年の城郭研究の進化に伴って、それは構造的に無理があるだろうと、もっと後の時代のものではないかということが分かってきたわけです。さらに、私もお縁があって、滋賀県立大学の教員をやっていた頃に、この美濃金山城の史跡の整備をしていくにあたっての発掘調査をやらせていただきました。非常に楽しく、3年間程、学生たちと合宿しながら美濃金山城の発掘をさせていただいて、大変楽しい思い出があります。

その時に出土した瓦は、コビキB手法で製作された瓦でした。たたらと呼ばれる粘土板を1枚ずつ剥がしていく時に糸で切っていくコビキのA手法と、鉄線で切っていくコビキのB手法というものがありまして、畿内では、天正11年（1583）の秀吉の大坂城築城の段階で古いコビキのAという糸引きから、コビキのBという鉄線引きに変わってまいります。つまり、コビキのBが出るという所は新しいということです。

実際、美濃金山城では、少なくとも天正11年以前には存在しなかったコビキB手法という瓦が出ています。もうここですでに、森可成による築城というのは、考えられないだろうなというのが、考古学的にも立証できたわけです。

一方で、当時使っていた陶磁器類、お茶碗。これは瀬戸美濃製品が大量に使われているのですけれども、ここも大窯という窯の第4段階。これは実年代として1590年から1600年ぐらい



資料1 美濃金山城跡曲輪配置図挿入

までのものが出ています。そうしますと、森可成、あるいは長可、さらには蘭丸の時代とは考えられないということです。

天正 12 年に小牧長久手の合戦で、森長可は戦死をいたします。また天正 10 年の本能寺の変で蘭丸・坊丸・力丸も戦死をしております。森家にとっては、継ぐべき人物はもう末子の忠政一人だったわけです。それで忠政が一応、この美濃金山城主になるわけですが、どうもこの忠政が美濃金山城主になった段階で、現在残されている石垣であったり、瓦葺きの建物というのを改修した可能性が一番高いのではないかと、考古学的には立証できたのではないかと考えています。

もう一つ全国的に少し広い視野で見ますと、どうやら慶長初年ぐらいに大きな築城の画期があるようです。関ヶ原の合戦の後、西軍に属した大名達は、領地を召し上げられ、東軍に属した大名達は、新しい任地に領国を与えられ、移動する。そうしますと移動したところで、新しい居城を築城します。慶長 5 年（1600）の関ヶ原の合戦から数年間で、日本にはたくさんの城が生まれます。

その時に、ほぼほぼ西国のお城は石垣が変わって、大量の石がいる。一気に積み上げていく。そうなりますと、石を割る技術が加速度的に進化をします。矢穴という石を割った痕跡が慶長 5 年以降の城には、多々認められるわけですね。ところが、どうも金山ではその割った石というのは、まだ認められない。ちょうどその端境期ぐらいというのがいいのかもしれません。

さらに言いますと、慶長 3 年、関ヶ原の 2 年前、秀吉が亡くなります。秀吉が亡くなると、政情不安になって、様々なところで、城の改修が行われたりする。まさにその秀吉の死とそれから関ヶ原の合戦によって、日本の城、とりわけ普請、石垣については、大きな画期を迎えます。

さらに森家自体も、信濃の海津というところ、現在の松代ですが、慶長 5 年 2 月、関ヶ原が起こる直前に、森忠政は移されます。そして、金山には城主が置かれずに、犬山城主の石川光吉に与えられ、有名な金山越えと呼ばれ、美濃金山城の用材が犬山に持ち運ばれる。そして美濃金山城は、破却、廃城になるという歴史があるわけです。

一方、海津城は、天正 10 年、甲斐の武田氏が滅んだ後、兄であった森長可が、まずは川中島に移されます。ある意味、忠政が海津に行くというのは、お兄さんの旧領、信濃の方に行ったということになるわけです。天正 10 年、信濃に森長可は行くわけですが、同じ年に本能寺の変があって、もう森氏は信濃から撤退をする。そういう状況があったということです。

〔資料 2〕 まず一番最初に居城になった美濃金山城です。これは山城です。山の上に主郭、それから東 1 から 5 の曲輪、左近屋敷、或いは南 1 の曲輪、南 2 の曲輪、西 1 ～ 2 の曲輪という、点々と曲輪が構えられているわけです。それらは基本的には石垣によって築かれているということになるわけです。先ほど申し上げましたように、この石垣が、森可成、或いは長可の段階とはとても考えられないということです。忠政の段階に改修を受けたということです。それからもう一つ、北の山麓に米蔵と言われているところがあります。こちら実は米蔵ではなく、山麓の屋敷（居館）ではないかと考えられています。



資料 2 美濃金山城跡南 2 の曲輪石垣

〔資料 1〕 大変面白いのは、山麓に居館を持ちながら、実は美濃金山城の大きな特徴の一つは山上の大きな曲輪に礎石の建物を配置しているということです。つまり、山の上にも居住空間を持っており、山麓にも居館を持っているという、他の山城で言えば、主郭部分に礎石の建物

があるというのは多々あるのですが、美濃金山城の場合、それ以外の曲輪でも、現在礎石の建物が認められるわけです。山の上に各曲輪ごとに、屋敷地があったという城作りをしているのは、金山の大きな特徴だろうと見てよいと思います。

〔資料2〕さらにそれらがすべて石垣によって築かれているということです。ところが、この石垣も大変面白い。上の部分、いわゆる私たちは天端とか、上端と呼んでいるところがほとんど崩されています。これは自然災害によって崩れたのではなく、人為的に崩されているということです。城が廃城になった段階で破城されてる。つまり、城を割られている、壊されているということです。城割りというのは、単純に作事という、建物だけを撤去するのではなく、このように石垣も潰します。

〔資料3〕とりわけ大事なのは、石垣の隅の部分、出隅の部分を潰していくわけです。もう上に建物が建てられないように、このような行為が認められるわけです。



資料3 美濃金山城跡主郭石垣①

〔資料4〕ちょうどその隅の部分なんですが、隅の部分の崩してる。まさに城割りというものが、ここで如実にわかる訳です。



資料4 美濃金山城跡主郭石垣②

〔資料5〕ちょうど、これは直角に折れ曲がったところですが、ここも一番出隅の部分が崩されている。こういう石垣が点々と残されている。



資料5 美濃金山城跡主郭石垣③

〔資料6〕それから先ほど申し上げましたように、主郭部分に礎石の建物が出ている。上に住んでるということです。山麓に居館を持ちながら、上にも居住空間を持つというのは、どうも山麓居館の使い方と、上の礎石建物の使い方に違いがあるのではないか。儀礼をしたりする空間と、もう一つはプライベートに生活をする空間、そういう違いがあるのではないかというふうに、私は見ているのです。山の上にも礎石の建物が検出されているというのはそういうことです。



資料6 美濃金山城跡主郭①

〔資料7〕これもそうですね。見事に礎石の建物が使われております。



資料7 美濃金山城跡主郭②

〔資料8〕もう一つちょっと注目しておきたいのは、どうも左近屋敷の石垣と、主郭部分の石垣に、なかなか説明はつきにくいのですが、積み方にちょっと違いがあるのではないか。つまり、左近屋敷の方が粗雑といいますか、古い積み方ではないか、時期差があるのではないか、忠政の段階でもちょっと時期差があるのではないかというような積み方が、この左近屋敷では認められるのではないかなと思っています。



資料8 美濃金山城跡左近屋敷石垣①

〔資料9〕それで、主郭の発掘調査を滋賀県立大学がずっと続けてきたわけですが、そこには大きく3時期の遺構が発掘調査で確認をされています。

それは、前期、築城段階から、瀬戸美濃焼の大窯の3段階の後半以前、人物でいいますと、森可成から長可の時代ではないかと思われる古い段階と、それから中期、これは忠政の段階で、なおかつ、細かくこの中期は1期と2期と3期に3区分できる。第1期は、大窯の3段階の後半。2期は1587年。なぜここまで正確に年代がわかるのかというと、桐紋の瓦が出ている。桐の紋というのはもう豊臣政権では、豊臣秀吉が諸大名に羽柴の



資料9 美濃金山城跡左近屋敷石垣②

名字や豊臣の氏を与えたり、桐紋を与えたりする。これを忠政の段階では 1587 年に賜っているということ。

3 期はそれよりも後、そして後期についてはもう廃城の段階。非常に細かな年代に改修をされているというのが明らかになっています。この辺りの改修の模式図といえますか、どんなお城が建っていたのかというのは、特別展でも展示をされているので一度また見てください。忠政の段階ですら、何回か修理改修をしているということでもあります。こういうものが発掘調査でわかったということですね。

海津（松代）城

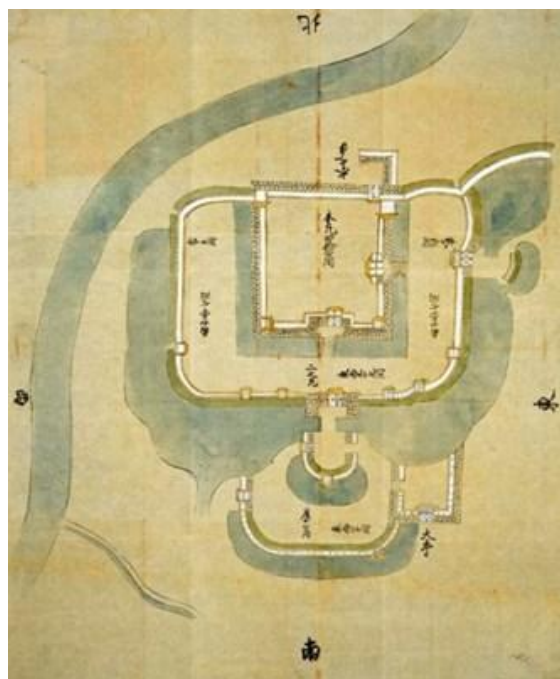
〔資料 10〕それからもう一つ、実は津山に行くまでの間の海津城。現在の長野市にあります松代城です。これは天正 10 年、先ほど言いましたように、武田氏が滅んだ後、織田信長によって、森長可に信濃川中島 4 郡を与えられて、この海津城を居城といたします。しかし、同年本能寺の変があって、長可は信濃を放棄します。

慶長 5 年、森忠政が 13 万 7500 石で信濃に移封され、この海津にもう一度、その居城を移します。兄長可の居城であった海津城を居城とします。この段階で、実は海津城も現在の構造に改修されたということです。今までこの海津城もよく言われるのは、2ヶ所に丸馬出しを構えています。とりわけ大手に関しては、二重の丸馬出し、三日月堀が二つ重なるという、これは戦国大名で言いますと、武田氏の、今までだと、もう独特の築城の一つだと言われて、武田築城の典型がこの丸馬出しと言われたわけです。

ところが、海津城に関しては基本的には森氏が入っていますから、近世に改修されている

のは明らかなわけです。そんな武田信玄の時代の城をそのまま居城にするはずがないわけです。そうすると、この武田の丸馬出しと言われているものが、このお城の真正面に来たり、或いは、この丸馬出しも、その東側の門の真正面に来るなんていうのは、馬出しに規制されるような近世の城づくりはありえないわけです。これは明らかに本丸を作って、二の丸を作って、その前に丸馬出しを作っているということ。だから武田ではない。武田ではないということは明らかだと思います。私は、これも森忠政によるものではないかというふうに考えております。

〔資料 11〕これは現在の海津城の姿です。近年、大手とか搦手が、門は復元をされているのですが、石垣はこういう具合に見事に残されています。



資料 10 海津（松代）城絵図（国立国会図書館蔵）



資料 11 海津（松代）城跡①

〔資料 12〕 これは天守台であろうというふうに言われている石垣であります。実は矢穴が入らない非常に古いタイプの積み方です。



資料 12 海津（松代）城跡②

〔資料 13〕 これもそうですね。天守台の部分です。これは、私は忠政が慶長 5 年に川中島に入って作ったのではないかと考えています。金山の石垣の技法といいますか技術がそのまま実は信濃に使われているのではないかとということなんですね。



資料 13 海津（松代）城跡③

〔資料 14〕 これも最近、復元をされている門です。



資料 14 海津（松代）城跡④

〔資料 15〕 後ろに天守台が見えております。この海津城の築城の後、慶長 8 年、備前・美作の太守であった小早川秀秋は子がなく、要するに絶家になるわけです。忠政は美作一国、つまり国持ち大名です。江戸時代の大名というのは、例えば親藩という徳川の一門、それから譜代という三河以来の家来、それから外様という関ヶ原以降に徳川の家来になったという親藩・譜代・外様といった家の分け方があります。

もう一つは、国持ち、つまり一国を持つという大名。例えば伊賀・伊勢 2 か国を藤堂氏が持っていたり、筑前一国は黒田氏であったり、土佐一国



資料 15 海津（松代）城跡⑤

は山内氏といった一つの国を持つ国持大名。

それから準国持ちというのがあります。準国持ちといったらほとんど一国持っているのだけれども、別の大名が少しだけいるというところで、有名なところでは肥後の細川氏です。肥後は細川家だけではなくて、相良氏という、人吉に小さな藩があつて、ほぼほぼ肥後一国だったということで、準国持ちという言い方をします。

次は城持ち。城を持つ大名です。次に城主格という、城を持ってもいいけども、持っていないものもいる。その下は無城主。つまり、城を持てない大名がいるわけです。江戸 300 諸侯と言われる大名の中で、100 あまりの大名は実は城を持っていないんです。彼らは陣屋というところに、居を構えていました。

ですから、もともと森忠政は海津の城持ち大名だったんですけれども、それが美作一国の国持ち大名として、信濃から津山、つまり美作に移ったということになります。

〔資料 16〕これは海津の先ほどの丸馬出しの三日月堀ですね。

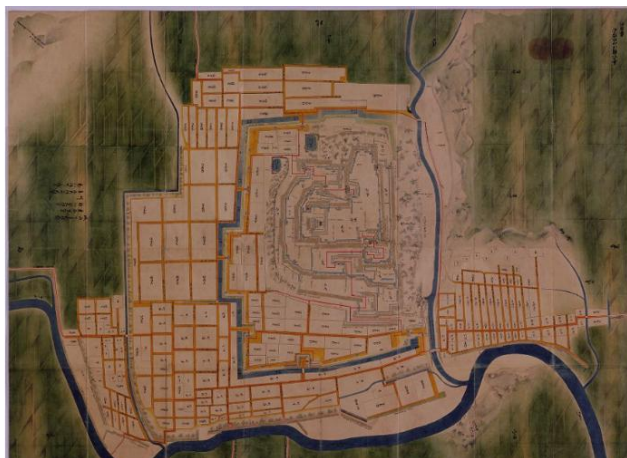


資料 16 海津（松代）城跡丸馬出しの三日月堀

津山城

〔資料 17〕これは津山城であります。これは見事に、南側は吉井川によって守られています。いわゆる自然の要害といいますか、要衝に築かれております。これは『正保城絵図』といって、正保元年（1644）に、徳川幕府が全国の大名に居城の絵図の差し出しを命じます。それで、諸大名たちは絵図を作成して提出をします。現在 63 枚が残されています。国立公文書館に 63 枚、もともとは江戸城内の紅葉山文庫に、150 枚ぐらいあったようです。今その中で 63 枚が残っていて、重要文化財になっております。幕府に提出する絵図ですから、非常に細やかなことを書いてあります。どこに武士たちの屋敷、城下町でいうと屋敷はどこまであって、城については、建物よりも、堀の深さ、それから石垣の高さ、石垣の長さ、つまり土木に関してはものすごく事細かに書かせているわけです。つまり、城の本来の生命線というか、城のあり方というのは、実は建物ではないわけです。私たちはすぐに天守閣を見たり、櫓を見たり、門を見たりするんですが、そうではなく、お城の本質というのは、普請なんです。土木工事です。石垣がどのぐらいの高さなのか、どれぐらいの長さを持っているのかということが大事なわけです。それを全部書かせているわけです。

もう一つは、実は城の本丸に、山城か平山城か、平城かということを書いております。よく私は質問というか、皆さんにお聞きするんですよ。この津山城というのは、山城か平山城か平城か。いろんな城の本に書いてあります、ちょっと本屋さんで見てください。一番有名どころは津山城で、この正保城絵図を上に掲げながら、本文の中に津山城は典型的な平山城と書いてある。



資料 17 津山城絵図（『正保城絵図』）①（国立公文書館所蔵）

〔資料 18〕これは大写しにしたところですが。本丸の部分です。「本丸山城」と書いてあるのがわかります。

津山城は山城です。ですから平山城と書いてある本は、実は間違っています。大半の本が、平山城と書いてある。一二三（ひふみ）の段という、石垣が3段になっていて、1、2、3、見事な一二三の段で構成されている平山城である。というのが、ほぼ 100%、本には書いてあります。

1 人だけ山城と書いている人がいるんです。私です。私も若い頃からずっと平山城だと思っていたんですけども、正保城絵図をチェックしていくと、山城って書いてあるんです。だから、江戸時代の人達は、津山城は、特に津山藩自体は、この絵図を作成した時に、私の城は山城ですと言って、それを幕府に提出してるわけです。

例えば、正本は残ってないんですが、控図で、金沢城も山城と書いています。金沢城が山城って割と意外です。でも山城って書いてあります。それから、高知城、大洲城あたりも山城と書いてあります。或いは丹波の篠山城、会津若松城は平山城と書いています。なんか平城っぽいんですけどね。海に面したところで有名な三原城は海城とか水城って呼ばれているのですが、正保図には平城と書いてあります。どうも江戸時代には水城とか海城という区分はなく、平城か平山城か山城だけだったようです。津山は見事な山城です。



資料 18 津山城絵図（『正保城絵図』）②（国立公文書館所蔵）

〔資料 19〕吉井川から望んだ津山城です。ある意味、山城っぽいんです。一二三段というのはここですね。1 段、2 段、3 段と石垣を積んでいます。同じような作り方としては、四国の有名な石垣普請の丸亀城。これも三段石垣を組むことによって、一二三段を構成しています。階段状に築かれたこの壮大な石垣、これこそが津山城の一番の特徴です。



資料 19 吉井川より望んだ津山城跡

〔資料 20〕これは、明治初年の解体される前の津山城の姿です。天守がちゃんと写っています。まさに 1 段、2 段、3 段にすべての櫓が収まっています。面白いのは、二重櫓の数が 25 基、これは日本ではおそらく広島城に次ぐぐらい。三重櫓はないんです。すべて二重なんです、これが 25 基作られている。

それから平櫓。平櫓というのは、1 階建てといますか、一重の櫓ですけども、これも 25 基、多聞櫓、長い長屋のような櫓が 10 基。計 60 基もの櫓。これはおそらく日本では広島城とともに断トツに多いです。すごい数の櫓を備えていた城だということがいえると思います。

そして、問題はこの天守です。こちらは五



資料 20 明治初年の津山城〔個人蔵（津山市提供）〕

重の天守です。内部は、穴蔵がある地下1階、そして地上5階の6階建てになります。

〔資料 21〕これは近年、復元をされた備中櫓です。例えば復元をしようとしたら、国の史跡ですから、インチキなものは建てられないわけです。



資料 21 津山城跡備中櫓（復元）

〔資料 20〕津山の場合は、明治の写真が残っています。天守も復元は不可能ではないわけです。これだけ見事な写真が残されています。その中で、今、備中櫓がまずは復元をされています。

〔資料 22〕こちらは天守台であります。明治まで残ってたわけです。明治6年（1873）に日本の近世の城というのは、存廃を決定されます。存城というそのまま城として存続させる城と、廃城は、つまりもう潰す城というのが、明治6年に政府によって分けられます。存城の場合は陸軍省が管轄をします。つまり軍隊が駐屯します。大体残された城は仙台、それから名古屋、大坂、広島、熊本、これらは鎮台という、後に師団になりますが、陸軍が入ります。広いですから。後に練兵場などが作られます。



資料 22 津山城跡天守台①

問題は廃城になった方です。これは大蔵省が管轄します。なぜ大蔵省が管轄するかというと、売却するからです。建物は全部競売に出して、これらはすべて売り払われます。有名などころでは、米子城の天守も明治6年まで残っていましたが、廃城になって、大蔵省が競売にかけてお風呂屋さんが落札して、米子城の天守はお風呂屋さんの薪になったということも実際に起こっております。

〔資料 23〕これは天守に登る石の階段です。



資料 23 津山城跡天守台②

〔資料 24〕もう一つ面白いのは、津山城の場合、普通本丸は平たい曲輪を作って、斜面地に石垣を積みます。津山城の特徴は内側も高い。つまり、石塁にしている。これは城外側から見たのではなく、城内側から見ています。そういう石塁状にしている。なおかつ、ここは雁木という石の階段があり、上に登れるわけです。

上には多聞櫓や櫓がありますから、そこで雁木という階段を作るんですが、ここは合雁木という、右にも登れるし、左にも登れるという、そういう合雁木が残されております。

ここも一気にこの上に登れる。これは搦手の方なんですけれども、そういう本丸の石垣が見事に残されてるわけです。

[資料 25] おまけです。ハート型。また津山行かれたら、探してみてください。きっと幸運が来るかもしれません。ハート型ってね、最近ちょっと有名らしいんです。

森家はここで改易になってしまうわけです。忠政は、美濃金山城を、おそらく現在のように修築をする。それから、海津で現状の海津城の基本を作り上げた。津山城は森家の改易の後、松平家という親藩が入るわけなんですけれども、元和元年以降は基本的には城の修築は元通りに直すしかできないので、縄張が改修されることはほぼないわけですから、現在の津山城の姿というのは、慶長 8 年に入った森忠政の段階でいいだろうと。こういう城の、居城の流れがある。この居城の流れは、イコール石垣の変化として捉えても、まずよいだろうと思います。



資料 24 津山城跡本丸石垣



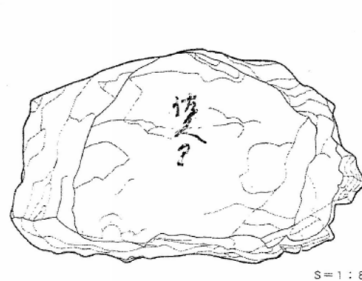
資料 25 津山城跡石垣

[資料 26] そこで、今、忠政の居城を見てきたわけですが、「お手伝い」という言い方を自らしますが、実際は動員されるわけです。天下普請という諸大名を動員して、豊臣政権や徳川政権が、城作りをします。それに参加していった森忠政の姿を見ていきます。

まず手伝い普請とは何か。石垣を積むときに、担当を分割する。ここからここまでは誰々が積みなさい。一つの城でそういう分割をする。これを割り普請という言い方をします。普請を分割しているわけですね。

信長が永禄 6 年に築城した小牧城の石垣からは墨書が出ています。何と書いてあるかという「佐久間」と書いてあります。佐久間といえば信盛が有名で、信長の家臣であります。ひょっとするとこれは佐久間信盛が担当したところ、割り普請の痕跡ではないかというふうに見られるわけです。

石垣で初めて作った小牧城で、すでにこういった割り普請があった可能性を示すものであり、これが出てきたときに、すごい注目をされ、話題を呼んだわけです。そこでひょっとしたら、丹羽というのが出てくるのではないかと、柴田が出てくるのではないかとということで出土した石垣の石材を、当時の担当者、現在の担当者もそうなんですけど、全部水洗いしてるんです。何千個も水洗いするんだけど、出てきません。この佐久間だけなんです。それ以外にもおそらくあったんだろうけれども、今のところは見つかっていないということです。



S=1:8



S=1:4

資料 26 小牧城跡出土墨書（佐久間カ）石材実測図
（小牧市教育委員会提供）

〔資料 27〕これは非常に重要な写真です。天正 4 年（1576）、信長の安土城築城の石垣の石材です。「惟住内九」と書いてあります。惟住というのは、丹羽長秀のことです。

『信長公記』によると、天正 4 年の正月から安土城の築城が始まるわけですが、その時の普請奉行といいますが、総奉行が丹羽長秀です。それで、ここはおそらく丹羽長秀の「内九」というのは人の名前か、或いは組の名前になるのかがわからないのですが、どうも丹羽が家臣や分けた組に分担をさせている。そういう可能性を持つ墨書なんです。今どこにあるかっていうと行方不明なんです。



実は、私は中学 3 年生のときに、安土へ行った時に摠見寺というお寺があって、そのお寺の庫裏の土間に、この石が置かれているのを、実際に見ております。ところがその後、行方不明になって、誰かが持って行った。持って行ってどうするかと思うんですが、今どこにあるか分からない。（秋田裕毅『織田信長と安土城』より引用）ですから、これはモノクロの写真ですが、秋田裕毅さんという安土風土記の丘資料館に勤められていた学芸員の書かれた創元社の『織田信長と安土城』という本に掲載されている、おそらく唯一の残された写真です。小牧城で信長は佐久間という墨書から、どうも割り普請をやっている可能性が近年、明らかになったわけですが、安土城では、間違いなくこれは割り普請の痕跡だろうという「惟住内九」、こういうものが出ているということなんです。これはちょっと注目してよいと思います。

伏見城

〔資料 28〕さて森忠政が参加をしたと見られるのは、伏見城の普請からであります。秀吉の城づくりというのは、天正 11 年の大坂城、つまり自分の居城である大坂城に始まり、文禄元年（1592）の伏見城。この段階で森忠政は、石垣普請に参加しているのだと思います。それ以前の石垣山一夜城という、これは小田原の北条氏を攻めた時の秀吉の本陣ですが、石垣の陣地を築いています。この時は、穴太という石工集団を 35 人返すので、帰りの宿馬の手



配をせよという文書が残っています。資料 28 前期伏見城（指月伏見城）復元想定図（京都市作成）から、穴太という石工集団が、石垣山一夜城に動員されていることはまず間違いないと思います。

それから、肥前名護屋城、これは秀吉の朝鮮出兵に伴って作られた、いわゆる大本営。そういうお城が作られています。そして伏見城が文禄元年に作られる。秀吉は、転々と城を作っているわけです。それらの城はすべて石垣づくりです。その石垣づくりが、おそらく全国に波及する要因となる。まだ東北では土づくりの城が主流のときに、東北の大名達も動員されながら全国の大名達が秀吉の城づくりに参加させられる。そこで、彼らはおそらく技術を学び合う。そういう機会ができていくわけです。

ですから天下普請というのは、動員されるのだけでも、動員された側もその技術を吸収できるというメリットがあります。ちなみに、秀吉は朝鮮出兵をした時に、朝鮮半島の南岸に倭城という城を築きます。今の蔚山（ウルサン）というところから順天（スンチョン）というところまで、20 ほどのお城を作っています。それらはすべて石垣づくりです。これらも、朝鮮出兵に動員された大名達が、朝鮮半島で作った石垣の城です。だから、肥前名護屋で揉まれ、或いは朝鮮半島の倭城築城で揉まれて、全国の大名達というのは、石垣づくりがほぼ全国的に平

均化していくわけです。同じような石垣が作れるようになっていく、という画期になるわけです。

家康も同じように、天下普請を行います。これは慶長6年、関ヶ原の翌年に近江の膳所城が一番最初ですけれども、広く天下普請の初めだと記されております。膳所城、それから慶長9年の彦根城、それから丹波の篠山城。篠山では、森忠政も参加をしています。そして、丹波の亀山城、近江の長浜城、尾張名古屋城、そして江戸城、さらには元和から寛永にかけての、現在の大坂城の普請に、森忠政が参加しています。要するに大名の大動員が起こるわけです。そして彼らは手伝い役とか、助役、そういう名前で、手伝い普請をさせられるということになります。

大坂城に行っていたら、ものすごい巨石があります。例えば蛸石という石は36畳敷けるような大きい石です。それ持って行くの大変なわけです。これは池田忠雄が、瀬戸内海から持って来ているのですが、滅茶苦茶お金がかかるわけです。手伝い普請というのは大名達にとってはすごく財政負担になるんだけど、一方で、いかに大きな石を持って行って、徳川に喜んでもらうとか、秀吉に喜んでもらえるかとかという。或いは、俺がそれを持ってきたんだという自慢になるわけです。金にかかる、財政も逼迫する、だけどそれを持っていくという、すごい自虐的なことをやるわけです。本当に矛盾してるわけです。大きい石持って行ったら、すごいお金がかかるけれども、だけどそれは自分の面目、揃いもそろって持っていくことをやるわけです。そういった矛盾したものが、僕は、この大名達のお手伝い普請に見られるんだろうなというふうに思っております。

その一番最初、まずは伏見城を見ていきます。レジュメにも入っておりますが、これは指月の伏見城の姿です。伏見城は実は場所の違うところに2回作られています。それは指月というところと、それから伏見山というところです。

しかも、関ヶ原の合戦の前哨戦で、石田三成が、この伏見城を攻めて炎上しています。関ヶ原の合戦後、実は伏見城は徳川家康によって再建をされています。ですから、秀吉政権だけの城でもないということなんです。

まず、森家の『先代実録』という記録を見ますと、文禄3年(1594)の正月より、「秀吉公伏見小幡山の城被築、御普請諸将へ被仰付、忠政君二モ、一方・・・」というふうに書いてあります。つまり、伏見山の城に動員されたと書いてある。しかし、実は伏見山は文禄5年の地震によって崩れた後、再建する後期の伏見城なんで、おそらく森忠政が動員されたのは伏見山ではなくて、一番最初に築いた、この指月の城でいいだろうと見ております。

私は前期伏見城と呼んでおりますが、指月というところに作られたので、昔から指月の城と言われています。『駒井日記』という記録には、「伏見御普請割之儀或いは伏見御普請衆」「伏見御作事衆」というふうに分担され、要するに割り普請であったことを示すような書きっぷりがありますので、これはもう割り普請に間違いはないと思います。ここに天守があったのではないか、それから構造は簡単に周りに堀を掘って、間に何本かの堀を入れて方形を意識した構造の城ですね。

伏見山というのはこの大分後ろの方にあります。文禄5年に、伏見大地震が起こって、ここが倒壊してしまいます。ここでは再建は無理だということで、秀吉はこの奥にある山に、現在伏見城の跡だと言われてるところに、伏見城を再建するわけです。これを私は後期伏見城と呼んでおります。今までは、伏見山に作られたと言われていたのですが、伏見山というのが、『森家先代実録』では小さい八幡の幡ですね、「小幡山」と書いてありますが、普通は木の、材木ですね、木幡山と呼んでいます。江戸時代の記録には、木幡山と出てくるんですが、秀吉時代には伏見山と出てきます。近年、文献史をやっておられる研究者は、木幡山伏見城は存在しない。伏見山伏見城と呼ぼうと言われております。

ですから、文献史の方は地震で崩れる前の伏見城を指月伏見城、それから地震後、慶長元年に再建されるものを、木幡山伏見城から現在では、伏見山伏見城と呼ぼうというふうに言われています。私は考古学的に、前期伏見城と後期伏見城と呼んでおります。ですから実は「小幡山」とは書いてるんだけど、文禄3年となると、やはりこの前期の指月の伏見城に、森家は動員されたのだろうと見てよいだろうと思っております。

現在ここは、国家公務員の伏見官舎の、団地になっています。実は私は、大学1回生の時、初めて発掘に行ったのが、この伏見城でした。文化庁が、東京から京都へ移ってきたので、知

り合いの文化庁の調査官に、今どこに住んでるのって聞いたら、ここに住んでるって言われたんで、そこは僕の青春の血と汗と涙が染み込んでる場所やって言ったんです。もうとにかく大学行かずに毎日、ここの発掘に行っておりました。

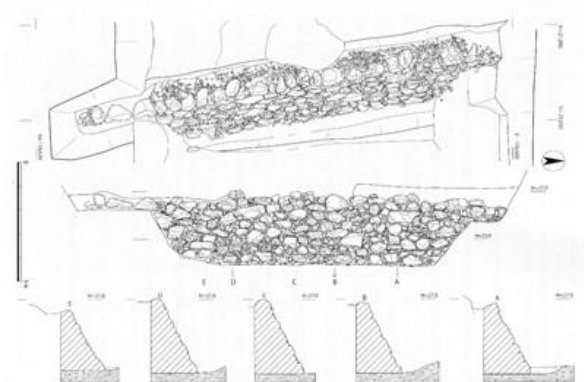
〔資料 29〕そこで、まずはこれを見てください。完全に団地になってしまっていて、伏見城の痕跡は一切ありません。その官舎の建て替えとか様々なことで、ようやく近年発掘をするようになって、こういった石垣が出てまいりました。



資料 29 前期伏見城（指月伏見城）跡で検出された石垣①

〔資料 29〕これ、内側が堀の跡です。これは東側の石垣です。こういったものが検出されたわけです。

〔資料 30〕これは正面。それから平面と立面。それから断面です。



資料 30 前期伏見城（指月伏見城）跡検出石垣実測図（京都市作成）

〔資料 31〕大体その傾斜角度が、上から見ますとね、実はなんで上から撮ったかという、前面が築石、石垣の部分ですが、その背後の栗石というのがこれだけしか入っていないです。つまり非常に薄い。だから、ある意味、地震で崩れるなっている感じです。

おそらく秀吉は、文禄 5 年、今は慶長元年の伏見地震と呼んでいるのですが、その結果、この指月の城は壊滅的に、つまり女中が 500 人も圧死した、という非常に大きな被害を生んだので、石垣もかなり崩れているわけですよ。そこでおそらく強固な石垣を新たな伏見山で作った。栗石の厚さは全然違う厚さを入れるようになったとか、かなりここでも石垣の耐震といいますか、地震に強い石垣にしようというような意図は、この後出てくるんだろうと思います。



資料 31 前期伏見城（指月伏見城）跡で検出された石垣②

〔資料 32〕それからこれを見ていただくと、色でわかるんですが、様々な石が使われています。チャートであったり、それから安山岩であったり、花崗岩であったり、つまり秀吉の時代は、まだ単一の石材にするのではなく石垣を積むことが大事なので、近隣から持ってくる石は全部使うという、1種類には決められない。だからいろんな種類の石が混じっているということです。これが伏見城の石垣の大きな特徴だと思います。



資料 32 前期伏見城（指月伏見城）跡で検出された石垣③

〔資料 28〕それから大体、ここで堀が見つかったので、こういう形だろうなというふうに京都市が復元をしたわけです。それで、傾斜角度等で見ると、一番高いところが、ここでは天守台でクエスチョンになっているんです。ところが、ここで指月の城は終わりだと思われたのに、この外側、J R奈良線の桃山駅のすぐ前で、駅前整備があつて、発掘したら、石垣が出てきたんですよ。だから、復元図はさらに伸びるといえる、伏見城が大きくなります。天守台よりも実は高いところ、地形的には高いところで、こういったものが出てきたわけですね。これすごく面白い石垣なんです。

〔資料 33〕これは溝ですけれども、溝に石を入れて根石にしています。石垣を築くのに一番最初に、僕らは根切りと呼んでいるのですが、溝を掘って、そこに根石を置いて、その上に石を積んでいく。この上の石はおそらく伏見山伏見城に使われるので持って行かれたと思うんです。根石だけが残っています。だけど、こんな根切りを使うということは、今まで城ではほとんど確認されていないので、実はこうした積み方があったんだということが分かったわけです。



資料 33 前期伏見城（指月伏見城）跡で検出された根切り技法①

〔資料 34〕根石ですら抜かれてるところを見ますと、根石を安定させるために、さらに間詰めをちゃんと円形に組んで、この上に根石をのせてたと思います。こちらもそうです。こういう具合にちょっと丸みを帯びているわけです。根石を据えると、今度は溝を埋めるように砂利を入れて固めるという、こういった地下構造といいますか、根石の構造がここでは明らかになったわけです。



資料 34 前期伏見城（指月伏見城）跡で検出された根切り技法②

〔資料 35〕 これもそうです。ちょうど雨が降ってたんでよく分かるんですが、窪んでいるところが大体、根石を据えたところで、周りに間詰めが石がちゃんと残されている。溝を埋める砂利よりは大きな石が、要するに根石を据える間詰め石になっています。非常に利にかなった根石の、これは工法だろうというふうに見て良いと思っております。根切り技法と呼んでいます。こういうものがあつたわけです。



今、指月の城の石垣を見ていただきました。先ほどの『森家先代実録』に書いてあるのは、木幡なんだけれども、年代的に言えば、
資料 35 前期伏見城（指月伏見城）跡で検出された根切り技法③
おそらくこの指月の城のことを言っているのだらうというふうに見てよいと思います。

伏見山の伏見城はどうか、先ほど申し上げましたように、伏見山というふうには呼ぼうということなんですけれども、ここは、ほぼ全体が明治天皇の陵墓地ということで、入れなくなっています。

何とかここを調査しようということで、今から 10 年ぐらい前に、考古学関係と歴史学関係の 16 の学会が、宮内庁に申し出て、立ち入り調査をやらせていただきました。すごいものが残ってるのだらうなと思って期待をしていたら、ほとんど残ってませんでした。なぜかという、徳川秀忠の段階に、大坂城を再建する。その大坂築城に伏見の廃材を全部持っていったので、基本的に石垣はほぼ残っていませんでした。だから、後期伏見城と呼んでいる伏見山伏見城については、ほぼ石垣はわからない。今見ていただいたのは、指月という前期伏見城の石垣が発掘で出てくるという程度しか、もう今は分からないのです。

大坂城

〔資料 36〕 豊臣によって、伏見城に動員をかけられたりしたわけですが、今度は慶長 5 年の関ヶ原以後に、森家は徳川の家臣として、徳川の天下普請に参加させられるわけです。これは、その中でも丹波篠山城の石垣です。篠山城は天下普請、つまり諸大名を動員した築城です。面白いと思うのは、篠山もそうですし、それから、伊予の今治、それから岸和田もそうですけど、石垣の基底部に犬走り状の平坦面が残っているんですよ。



資料 36 丹波篠山城跡二の丸石垣

なぜこんなことをするのか。攻められたらここは敵の足がかりになるんじゃないかってことですが、この犬走りを残すことによって、実は堀を掘る時に同時に石垣を積むことができます。普通は堀を掘った後に石垣を積んでいくということで、堀を掘る時間、石垣を積む時間というのが、両方かかるわけです。

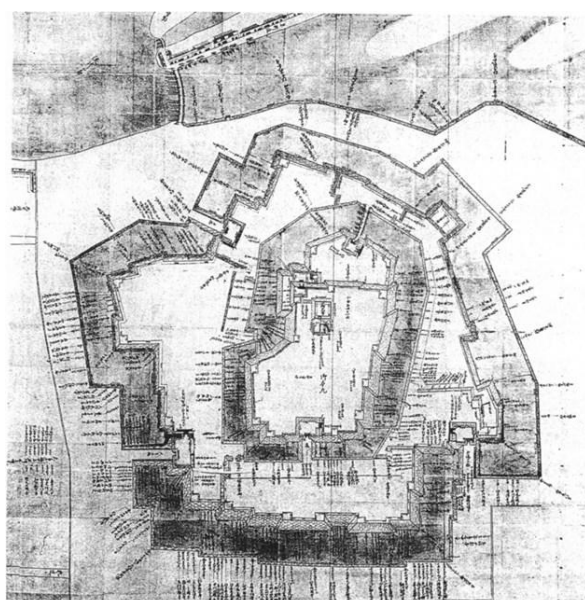
ところが、このハバキ（犬走り）を作ることにより、堀を掘って同時にハバキの内側で石垣が積める。堀と石垣が同時に進められるわけです。これは非常に築城を短時間にできるようになる、というのが藤堂高虎によって開発されたということです。これが丹波篠山なんかでは、よく見かけるわけです。

〔資料 37〕篠山では、刻印に「三左之内」とあります。これは池田三左衛門輝政が築城に参加させられているということが、この刻印から分かるわけです。



資料 37 丹波篠山城跡刻印「三左之内」

〔資料 38〕そして今度は、徳川幕府による大坂城の再建。展示にも大坂城の丁場割りが展示されています。これは国立国会図書館にある大坂城の丁場割り図です。どこからどこまで、誰が担当したかというの全部書いているわけです。工期は、だいたい 3 期に分かれます。3 期というのはこういう状態です。



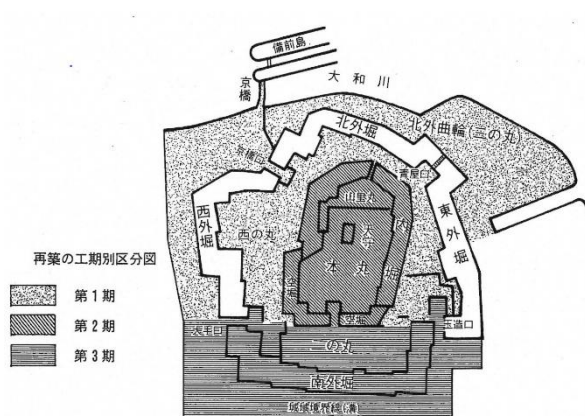
資料 38 大坂城丁場割り図（国立国会図書館所蔵）

〔資料 39〕現在の大坂城は、この点々の部分が第 1 期工事、それから第 2 期工事が本丸のところ、そして第 3 期工事がこの南側面。こういう 3 期に分けて普請されている。

その普請の状況、第 1 期は元和 6 年から、まずは普請の総指揮は藤堂高虎が行います。第 2 期も藤堂高虎。そして、3 期は戸田氏鉄。というように藤堂高虎による石垣普請があったというのが、これからは分かっていると思います。

そして参加大名。第 1 期は西外堀、北外堀、東外堀で 31 ケ国 48 家の大名が動員された。第 2 期は内堀と天守台で、寛永元年から始まっています。32 ケ国 57 家の大名が動員された。第 3 期は南外堀で、寛永 5 年から 6 年、32 ケ国 54 家の大名が動員されています。

よく全国の名大が動員されたって言われているのですが、あまり東北の名大は動員されて



資料 39 大坂築城の工期別区分図
(渡辺 武『図説 再見大阪城』より引用)

ないんです。なぜか。やはり石垣づくりが下手だったのではないか。下手な連中には任せられません。西国大名の方が圧倒的に上手い。

江戸城も天下普請で作られました。江戸城は計画的に堀を掘る方と石垣を築く方で分けられるのですが、東北の大名達は基本的には掘り方に回されます。堀を掘る方ですね。だからよく、全国の外様大名に賦役を課したっていうのだけど、下手な連中にはやっぱり任せられないんですよ。崩れたらどうしようもないわけです。ですから西国の大名達、つまり秀吉以後、石垣普請が得意であった西国大名達が、やっぱり中心となっているということは否めないと思います。

徳川幕府による大坂城の再建は、「御内談の上、大坂の故墟を改められ、池（堀）の深さ、石垣の高さ旧時に増し、諸大名に丁場割り付」というふうに、藤堂高虎は言っているわけですね。つまり、秀吉の大坂城の倍の高さの堀と石垣を作った。

今こうやって聞きに来てくださっている方はほぼ 100%、今の大坂城が徳川幕府によって作り直されたというのはご存じだと思いますが、ようやく「プリンセス・トヨトミ」の映画とかで、今の大坂城は徳川幕府が作ったということが浸透してきてはいますが、まだまだ、国民の大半は、秀吉の大坂城というイメージが強いみたいです。

今、大坂城へ行ったら、日本の観光客より圧倒的に韓国、中国の方が多い。僕が聞いていると、韓国の人が「憎き秀吉が作った大坂城の石垣です」と説明をしていらっしゃるわけですよ（と、思います）。それで、いつもその時に、「いや、これ実は徳川幕府が作ったんですよ」と言ってあげようかと思ってしまいます。

まだ、秀吉があんな大きな石を積んだと思っている人は大半なんですけど、今は一石一草にいたるまで豊臣のトの字もないわけです。元和 6 年（1620）から寛永 6 年（1629）まで、わずか 10 年ほどで、今の大坂城は積み直されているということです。

〔資料 40〕そこで、まず知っていただきたいのは、森忠政による手伝い普請は、絵図で明らかなわけです。実は森忠政には 3 期すべて、つまり第 1 期、2 期、3 期すべてに動員がかかっています。

外様大名の、国持ち大名の雄藩で、しかも石垣の経験が豊富なわけです。3 期ともに動員がかかるということです。第 1 期は北外堀 96 間 1 尺。これが北外堀のあたりに建ってる乾櫓。この辺の石垣が、森氏によって築かれたところですよ。



資料 40 大坂城跡北外堀石垣（櫓は乾櫓）

〔資料 41〕それから第 2 期は内堀の東面 36 間。これはおそらく日本で一番高い石垣になります。30m 近い、すごい高さの石垣を積んでいます。これが第 2 期の動員。



資料 41 大坂城跡内堀（東面）石垣

〔資料 42〕それから第3期は南外堀で36間5尺1寸2分。ここなんかものすごい幅の広い堀を掘っています。こういった、その主要部分に森忠政が手伝普請として参加させられていたわけです。



資料 42 大坂城跡南外堀石垣①

〔資料 43〕これもそうです。南外堀を正面から見た、この辺りが森氏によって担当された部分になるわけです。



資料 43 大坂城跡南外堀石垣②

〔資料 44〕大坂城に行きますと、色んな所で刻印というのが見られているわけです。私は、小学5年生の時からお城が好きになって、中学2年生の時に「日本古城友の会」、これは今でもあるんですけど、その友の会に入ったんです。その頃、昭和43年くらい、友達は誰も入っていない。会員全員、おじいさんですよ。そこで孫のように可愛がっていただきました。で、何をしたかという、この刻印の調査というものを日本古城友の会の藤井重夫先生という、在野の研究者なんです、刻印研究では第一人者です。それに毎週日曜日に参加していたんです。僕は大阪の人間だったんで。どんなことをするかというと、さっき見た30mくらいの石垣の上にロープをしばって、降りていくんです。それで降りていきながら、ここに丸に山と書いてある所があるんですが、何本かロープを垂らしながら、そこにチョークで印を入れていく。そしたら写真を撮ってどの石に、どういう刻印があるのかっていうことを、中学時代に調べていったんです。



資料 44 大坂城の刻印（内堀西面の山崎氏丁場）

その藤井先生がよく言われていたのは、残りの良い刻印は朝、昼、夕方、いつでも見れる、だけど風化してるものについては、朝しか見れないものとか昼になったら見れなくなるとか、それから見る向きによって分からないものがあるから何回もやらなあかんとおっしゃったんです。ロープを垂らしながら毎週日曜日、刻印調査に行くのが僕は、すごく楽しかったです。こういう刻印というのを入れるわけです。

その藤井先生がよく言われていたのは、残りの良い刻印は朝、昼、夕方、いつでも見れる、だけど風化してるものについては、朝しか見れないものとか昼になったら見れなくなるとか、それから見る向きによって分からないものがあるから何回もやらなあかんとおっしゃったんです。ロープを垂らしながら毎週日曜日、刻印調査に行くのが僕は、すごく楽しかったです。こういう刻印というのを入れるわけです。

森家の刻印も、今、刻印石広場という、いろんな刻印が見れる広場があって、そこに森家の刻印もあります。

〔資料 45〕 これなんかはすごく面白い。ここは丸に轡の紋がある。こちらには丸に二八、ちょうどここで担当が違うんです。伊予大洲藩の加藤家という大名と、丹波園部藩の小出家という大名のちょうど丁場の境に位置します。丁場の境目ですから余計刻印も多いんです。うちはここまでやります。そういう刻印が大坂城にはいっぱい入っています。

森家の刻印も今申しあげましたように、刻印石広場、残石を持って行った所では見ることができます。これはこういう所にチョークで印を入れると分かりやすいです。



資料 45 大坂城の刻印（隠シ曲輪の小出氏と加藤氏丁場）

〔資料 46〕 これは三柏、土佐の山内家の家紋を入れている所になります。大坂城に行くといろんな刻印を見ることができます。



資料 46 大坂城の刻印（土佐藩山内氏）

〔資料 47〕 これは日出藩の木下家。これはすごく綺麗、丸に木下の木というのが一個ずつ入れている。こういう刻印が大坂城では見れるということですね。

先ほど少し申しあげましたが、東国の大名達は、ほとんどこういう石垣普請には動員されないんですけれど、津山の森家は第1期工事から参加させられる。それは、やはり森家が石垣を積めるから。じゃあ森家がなんで石垣を積めるのかというと、前半見てもらった森家の居城であるこの美濃金山に始まって、海津、それから津山で、あの見事な一二三の段の石垣を積んでいくという、彼らの技術で



資料 47 大坂城の刻印（日出藩木下氏）

す。当然、元和以降、大坂城に使われます。それから天下普請、手伝普請とは言いますけれども、やはり、その素地の無い大名は積んでも崩れるだけなので、金山から積んできた技術というのが、大坂で使われたといっても過言ではないだろうと思います。

さて、終わりにですが、森忠政の時代というのは、今見てきましたように、自分の居城の築城、それから豊臣政権や江戸幕府の手伝普請、つまり天下普請に動員される。軍隊を出すだけではなく、いわゆる城の普請にまで動員される。そういう時代だった。そうしなければ取り潰されるということになるんです。一方で、そういった手伝普請が日本の石垣を一気に飛躍させるとともに、全国平均化していきます。そこで様々な個性のあった石垣が、おそらく私は秀吉政権だと思うんですが、秀吉政権の天下普請で情報交換したことによって淘汰されていく。肥前名護屋城は様々な積み方の石垣があります。これは個々の大名の特徴といっても過言ではない。しかし、その後どんどん統一されていく。

とりわけ先ほど言った慶長地震が起きて、強い石垣を作らないといけない。様々な石垣でなくて強い石垣を作る。そして、その後を継いだ徳川幕府の様々な天下普請、丹波篠山や膳

所、あるいは彦根、名古屋、そしてその集大成がこの大坂城だった。それらが日本の石垣の技術を一気に飛躍させたのではないかと。美濃金山の野面積みという自然の石で積んでいたものが、最終的には大坂城では切込み接という、ちゃんと割った石を使うようになる流れが見えてくるのではないかなと思います。

ただ、すごく面白いのは、この天下の大坂城って諸大名が毎回 50 ほど動員されるんですが、それは全て普請です。伏見城では御普請衆、御作事衆というのが出てくるのですが、大坂で大名が作事に動員されることはないわけです。つまり、建築は中井家という大工頭がいて、ちゃんとした大工が担当するのだけれども、石垣については全て大名にさせるんです。では、大名はそんなに石工を抱えてたかという、抱えてるわけがない。それでは誰が積んだかという、おそらくこれは足軽たちだと思います。割るのもおそらく足軽、運ぶのもおそらくそうです。指揮は、こういう場合こう積みなさいという現場の指導者・総指揮者は、これは穴太頭ですから、いわゆる石垣の専門集団です。そんな何十万も何百万も大坂城に使う石、全部そんな石工専門集団ではないわけです。基本的には足軽たちが積んでいる。

しかし、作事は足軽たちではできない。ここで土木と、やっぱり建築の違いがあるんだろうなと思います。彦根藩では彦根城の修築、もちろん幕府に願い出て石垣普請をするわけですが、その時は足軽に動員がかかります。彼らは石を運び積むという、江戸時代でも、やはり彼らの仕事の中に含まれていたんです。ですから、石垣の技術は割る人達、積む人達というのは専門家集団ではなく、それぞれの大名の足軽たちであったというわけです。

だからこそ普請には、手伝い普請というので天下普請で手伝い枠が導入される。作事についてはそんな大名には動員がかからないということではないかなと思います。

まさにそういった様々な築城に動員された結果、美濃金山城のあの野面積みの石垣は、同じ森忠政なんですけれど、色々な所に動員され、あるいは自らの居城の築城をすることによって、最終的には今見ていただいたような、大坂城の元和から寛永にかけての石垣になっていくんだと、これは決して森家だけではなく、他の西国の外様大名達に認められることだと思います。

まとめ

石垣の進化というのは、まさに手伝い普請によって様々な情報交換があったり、秀吉の文禄・慶長の役ぐらいから出始め、徳川の天下普請でそういった情報交換がなされることによって、全国の名大名が動員され、学んだ結果、こうした切石の見事な大坂城の高石垣が築かれました。

今度、大坂城に行かれる機会があれば、森家の分担したあたりの石垣を見ていただいて、美濃金山城の石垣の最終進化したのがこれなんだというふうに見ていただいたら、美濃金山城にも違った視点が出てくるのではないかなと思います。

最後にもう一つ言っておきますと、江戸 260 年間の間に石垣というのは地震・大雨、様々な理由で崩れます。その時は必ず幕府に申し出て、石垣修理をします。様々なお城では、そういった修築の履歴というのが石垣の中にあります。金沢城は、様々な積み方が見れるわけです。大坂城は恐らくほとんど積み直していない。寛永に完成するわけですが、寛永年間以降、江戸時代を通じてほとんど修築の記録がない。それから石垣もほぼ同じ積み方で見ることができるわけです。ですから、いかに大坂城の石垣の技術が、完成された姿で、元和から寛永にかけて積まれたんだということも、ちょっと大坂城で見ただけだとありがたいなと思います。

ということで、与えられた時間がまいりました。森家の石垣というものが、少しでも明らかになればありがたいなということで、終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。